リレー橋友録 私の橋歴書

〈600〉

夢の途中

大日本コンサルタント株式会社
経営統括部 技術統括室 主幹 髙楊 裕幸

〝美しい橋を造る〟高校時代に思い描いた夢を、私は今も追いかけている。

昭和36年、東京都中野区に生まれた私は、両親が長崎県佐世保市出身であったため、盆暮れにはよく寝台特急「さくら」で帰省した。結果、車窓から眺める九州の景色が私の原風景となり、幼少の頃に出会った「西海橋」が橋の原点となった。

建築家であった祖父の影響を受け、〝大規模なものづくり〟に興味を抱き育った私は、高校時代に改めて接した「西海橋」から、〝周辺景観との関係〟〝プロポーション〟〝細部のこだわり〟の3点が〝橋のデザイン着目点〟と教えられ、同時に橋づくりに運命を感じた。

進学した大学では、応用力学や○△工学などの講義にあまり興味は抱かなかったものの、勉強の目的や意義だけは明快であったためか、夢は消えなかった。卒業研究は、「橋梁美に関する一考察」と題して、東京から九州間の著名橋を1か月程度で巡り、自分なりに橋と対話しつつ管理者を訪ね、思いと結果を確認する旅を纏めた。

ここ10数年、宮崎大学や芝浦工業大学などで縁有って「シビックデザイン他」を講義しているが、始めに伝えることは勉強の目的や意義であり、「美しい事例」を数多く見せることと決めている。

昭和59年に川田工業に入社し、一通りの橋梁形式と各種段階の設計（予備・概略・詳細・補修／補強設計）を4年ほど経験させて頂いたものの、〝自分で形を決めたい。美しい橋を造りたい。〟との初心が膨らみ、大日本コンサルタントに入社した。

その後は一貫して「景観・デザイン」畑で、常に同僚の松井幹雄氏と切磋琢磨しつつ、橋や道路、河川や公園の土木技術者はもとより、プロダクトや土木のデザイナー達と共に仕事をしてきた。

少し作品を振り返ると、道路橋では日本初の舟形桁断面を有する新栖岩橋（栃木県）、M＋Mデザイン事務所と協同した世界初の構造形式・上横支材を有さないダブルデッキニールセンローゼ橋で田中賞を受賞した五色桜大橋（東京都）、デザイナー友岡秀秋氏との共同作業で土木学会デザイン賞を受賞した南本牧大橋（横浜市）、グッドデザイン賞を受賞した苫田大橋（岡山県）、親愛なる上司・田村幸久氏との初めての共同作品となった新豊橋（東京都）などが挙げられる。

また、ランプ橋や擁壁・道路付属施設・植栽などのトータルなデザインを行った羽田空港内湾岸道路（東京都）、自然環境に配慮したオリンピック道路の設計で土木学会デザイン賞を受賞した志賀ルート（長野県）、日本最後の清流環境を守るべく擁壁・桟道・トンネル・橋梁などを効果的に用いて道路を改築計画した国道381号四万十道路（高知県）などの作品を、自分としては可能な限り丁寧に、様々な関係者と共に造り上げてきた。

そして今、ベトナムハノイで6径間連続斜張橋を含む延長約4㌔の道路、ニャッタン橋プロジェクトにアーキティクトとして参画している。

同時に土木学会などの社会活動を通じて、幾つかの書籍やマニュアルの作成を、また、土木におけるデザインの位置付けやデザイナーの地位向上に、微力ながら寄与してきたつもりである。

これらの活動を通じて得た仲間やネットワークは、個人的にも業界的にも何にも代え難い財産であると考えている。ここ数人続く「リレー橋友録」のメンバーも、ネットワークの先導者・篠原修氏が立ち上げ今は解散した「景観デザイン研究会」の仲間である。

〝美しい橋を造りたい。〟と志して四半世紀が経つ今も、未だ完璧と感じる作品は完成しておらず、〝夢途中の身〟ではあるが、現在の心境は〝橋は美しくなければならない。〟と確信に変わっている。橋に係わる皆が一丸となって、目に見える「美しい国づくり」を実践しましょう。

次回は山梨大学の石井信行さんにお願いします。

2007年4月11日　橋梁新聞